

講義

「キオクをキロクする」というアーカイブ

講師：NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台
副理事長 佐藤 正実

1 NPO 法人の活動について

地域の方から預かった写真、8mm 映像、古地図、古写真を使いながら、いかに少ない NPO 法人のメンバーでいかに市民を巻き込んでアーカイブしていくか、魅力を発信していくかということについて活動をしている。元々 2009 年に地域アーカイブを主目的に三つの会社で集まってそれぞれのスキルを合わせた活動を行おうということで設立した。講師の会社では古地図や古写真を扱っており、別の会社は映像制作会社なので 8mm 映像の収集、保存、編集を担当している。そしてもう一社は BGM、音楽、録音された言葉を扱っている。2011 年の震災後は震災アーカイブもプロジェクトとして立ち上げ進めている。

2 アーカイブに必要なプログラム

「アーカイブ」とは「文書やデータなどの資料を収集し保存したもの」という意味であるが、新聞記事などでは伝わりやすく「記憶」「面影」「思い」などと言い換えられる場合もあるようだ。この活動のために必要なプログラムとして、①観る、撮る（定点観測）②集める（素材収集）③語る場を設ける（拠点をつくりアウトプットする機会を設ける）④聞く（オーラルヒストリー）⑤編集（保存）⑥観せる（展示会）という六つを打ち出している。

3 個人の記憶から地域の記憶へ

活動をしていく中で、パーソナルな写真になればなるほど地域の差はなくなっていくことに気づいた。つまり、「日常の暮らし」は住んでいる地域に関わらずイメージしやすいということである。

例えば町内会や高齢者施設に行き、行事や学校など多くの人が経験していると思われるワンシーンの写真を見せ、それぞれの体験談を話してもらい機会を設けるとする。すると、たった一枚の写真を題材としているのに長時間にわたる思い出の共有が始まる。世代

が大きく違って、ひとつの写真を元にそれぞれの思い出を語り始める。これは年代に関わらず起きることである。こうして同じ地域の人から語られた同じような記憶を集めていくと、その地域の記憶になる。これを繰り返して地域と世代間の交流を促していくことができれば、地域の魅力が増していき、いずれはその地域のファンをつくることになるのではないか。

4 古地図、古写真の活用として

例えばとある道路について、大正の地図と昭和の地図と昭和の絵葉書、そして現在の道の写真を順に見ていくことで、どうしてその道路が今の姿になったのかを知る手がかりを得られる。自分たちの町がなぜ現在の町並みになったのかを、町に残る痕跡から調べることができる。

5 他人事からジブンゴトに

震災に関する写真や記憶を集めているが、これをどう利活用するのかという課題は震災アーカイブも地域アーカイブも同じである。

「地域のキロク」「震災被害のキロク」ではなくて、生活という誰もが身近にイメージできる写真で共有することが大事だと考える。キロクだけだと他人事になってしまうが、生活という誰もが身近にイメージできる写真や思い出を共有してキオクにも紐付けることで「ジブンゴト」となり、長い間忘れない記憶になるのではないかな。

～記憶は風化する。だから、風化している後世のために記憶を記録し残す。～



(佐藤講師による研修の状況)